

「こんぴらさん」初詣と例大祭御神幸

高知県 建設／総合技術監理部門

右城 猛

Ushiro Takeshi

(株) 第一コンサルタンツ



1. 初詣のきっかけ

「讃岐のこんぴらさん」で親しまれている金刀比羅宮（ことひらぐう）に初詣を始めたのは、平成 18 年、54 歳のときである。理由は 3 つあった。

1 つは厄払い。平成 17 年は私にとって最悪の年であった。1 月 12 日に父が心筋梗塞で突然他界した。その直後の 1 月 26 日に私が糖尿病で入院した。4 月には、ある専門誌に書いた私の記事に対して読者からクレームがあり、大きな問題になった。7 月には大学に行っていた娘が大きな交通事故を起こした。これまで順風満帆であった私に災いが次から次へと襲ってきた。見放された運をなんとか引き戻したいと思ったのである。

2 つ目は健康のため。金刀比羅宮に参拝するには 785 段の石段を登らなければならない。糖尿病には良い運動になると考えたのである。

3 つ目は、プレキャストコンクリート製のガードレール基礎「プレガード」の普及祈願。平成 14 年に製造・販売を開始したプレガードは、その年に国土交通省の NETIS 登録を受け、高知県のエコ産業大賞の「大賞」を受賞、平成 15 年度にはテレビ番組「企業未来・チャレンジ 21」で全国に放映されるなど順調な滑り出しであった。ところが平成 16 年の末に、車両用防護柵として必要な性能を満たしていないということが土木研究所より指摘された。この問題を何としても解決しなければならない状況に置かれていたのである。

初詣を行った年から不思議と幸運が巡って来だした。プレガードの問題も無事解決し、大ヒット商品になった。単なる偶然ではなく、「こんぴらさん」の御利益と思っている。

以後、正月には家内と連れだって金比羅参りを欠かさないようにしている。平成 20 年からは本宮だけでなく、さらに 583 段奥に上った所にある



2010 年の初詣

巖魂(いづたま)神社まで足を伸ばしている。奥社あるいは奥の院と呼ばれている所である。巖魂神社の海拔は 421m。本宮より 170m 高く、登るのは結構きつい。

2. 幸運の道理

金刀比羅宮に行ってもまず驚かされるのは、参道の両脇に寄進者の氏名と奉納金額を刻んだ石柱が無数に立てられていることである。株式会社セシル社長正岡道一などの名前が刻まれた大きい石柱には金一封と刻まれている。石柱の大きさからして 1 千万円以上寄進されたのだろう。

私は、以前には信仰心の欠片も持っていなかった。最近、金比羅参りをすれば願い事が叶うと信じるようになった。金刀比羅宮には、毎年百万人が参拝し、多額の寄進をしている。御利益がなければ何百年も信仰が続けられるはずがない。

整体を考案した野口晴哉（のぐちはるちか）の言葉に「念ずれば現ず」というのがある。今の自分は、過去に思考し、行動した結果である。自分の「あるべき姿」つまり目標を思考して、行動すれば目標は必ず実現するという意味である。



絵馬に願い事を書く(2010年)

初詣で祈願することは、自分の目標を思考して明確にすることに他ならない。絵馬に書けば、目標がさらに明瞭になる。あとは目標に向けてひたすら行動を起こすのみである。

金刀比羅宮には、参拝者が守らなければならない「金刀比羅本教教憲五条」というものがある。少し長いが全文を紹介する。

- ① 自己の生命は遠い祖先の神々に連り、なお子々孫々に繋がる永遠かつ絶対であることを忘れないこと。
- ② 自分も神の分身であるから日々祓(はらい)の修行を怠らないで心身共に清浄潔白を保つように勉めること。
- ③ 不平を言ってはならない。神恩の感謝と歓びを祓(はらい)以て一切を処理すること。
- ④ 神人合一の境地に達するためには浄明・正直を旨としなければならない。
- ⑤ 人は何れ高かれ低かれ神となるものであるから、高い神となるよう日々の修行を怠ってはならない。

これは「幸せの法則」と言うべきもので、社会の中で上手く生きていくための経験則に他ならない。初詣で祈願したことは実現する。これは道理にかなっている。何も不思議なことではない。

3. 御神幸行列に火消筒持役で参加

金比羅宮では、毎年10月10日・11日に例大祭(れいたいさい)がある。そのメインイベントの御神幸(おみゆき)行列に火消筒持役で参加する幸運に



馬場義幸氏の自宅で平安時代の浄衣に着替える

恵まれた。

昨年の8月、丸亀市綾歌町に住んでいる馬場義幸・千津子夫妻が「よさこい鳴子踊り」の見物に来られた。義幸氏は、定年退職され悠々自適の生活をおくられているが、以前は土木資材を製造販売する会社で営業部長をされていて、私が勤務する会社によく来られていた。奥様は家内の大学時代からの友人という関係もあり、以前から親しくお付き合いさせていただいていた。私の馴染みの居酒屋で一緒に食事をした。その席で、こんぴらさんの例大祭の話聞かせていただいた。行列の一員として是非加えていただきたいとお願いしていたのである。

例大祭の御幸神に参加する奉仕者は数百人いる。金比羅宮の近くに住んでおられる人々である。その内の20人の世話役を馬場家が代々務めている。今年は二人の欠員があり、そこに義幸氏の従兄弟になる斉藤博之氏と私が入らせていただけることになったのである。

10月10日の夕方、馬場家に綾歌町岡田東地区の奉仕者10名が集まって、金比羅宮から借りてきた平安時代の意匠・浄衣(じょうえ)に着替えた。狩りや蹴鞠(けまり)など野外の遊び着として着る狩衣(かりぎぬ)と同じである。純白の正装に着替えると、身も心も清められた気分になる。

参道の石段を431段上ると、桜馬場西詰銅鳥居があり、その左側に広場がある。広場の中央には大きなクスノキ、奥には厩(うまや)と便所がある。

松明(たいまつ)持役と火消筒持役は、本宮から

降りてきた行列にここで合流することになっていた。馬場氏らの出発点は、本宮なのでここからさらに354段上らなければならない。毎年初詣に来ているので安易に考えていたが、わら草履で上るのは結構きつい。馬場氏の忠告に従って軍足を二枚重ねて履いていたが、それでも鼻緒を挟む足が痛い。今思えば、鼻緒に白い布を巻いておくべきであった。

この広場まで上ってきたときには汗だけで、しばらく汗がとまらなかった。しかし、椅子に腰を降ろして待機していると、風が吹くので寒さを覚えた。

夜の9時、予定通りご神体を乗せた御神輿(おみこし)が本宮を出発した。行列の先頭が私達のいる広場に到着したのは、9時20分であった。御神幸と呼ばれる行列は、奴(やっこ)組を先頭にして、乗馬の男頭人(おとことうにん)二人と駕籠の女頭人(おんなとうにん)二人を中心とした頭人行列、猿田彦、神馬(しんめ)、巫女(みこ)、伶人(れいじん)、御神輿(ごしんよ)、宮司(ぐうじ)以下神職、祭員など約500名で構成されている。

頭人とは、汚れない童男・童女には神が宿るという古い信仰から、祭りの日に山の本宮から里の神事所まで、神様を先導して下りてくる子どものこと。頭人に選ばれるのは、最高額の寄付をした人の親族から選ばれる。一説には2000万円の寄付が必要とも言われている。

行列は、本宮から麓の神事場(じんじば)まで約2キロの道のりを3時間かけて進む。10日の御神幸を「おさがり」と呼ばれている。

平安絵巻さながらの光景は、素晴らしいようであるが、御神幸の一員として参加すると、自分がいる前後の様子しか分からない。

行列に奴が加わるのは、表参道の石段が無くなって平坦になってからである。

齊藤博之氏が、私の相方となる松明持役。松明は、長さ15cmほどの松の木片約20個を、長さ1m、幅1cmほどの竹材で囲んで束ね、それを約10cm間隔に紐で縛って作られている。先の方から手元の方に燃えるのであるが、束ねてある紐が燃えて切れると、火がついた木片が路面に落ちる。

それに水をかけて火を消すのが私の役目である。

この行事は、江戸初期の1603年に始められたようであるが、松明はそのときのままなのだろうか。手に持って歩くだけでは火が消えてしまう。四六時中振って、空気を送ってやらなければならない



行列の先頭を行く奴



駕籠に乗った女頭人



天照大神の孫のニニギが、高天原から日本に降りる天孫降臨の際に、高天原から日本までを照らしたとされる猿田彦の神



松明持役の齊藤博之氏と火消筒持役の私



ご神体が入った御神輿



雅楽を演奏する伶人(れいじん)行列

ないので、結構腕が疲れるようである。火消筒持役が一番楽だと思っていたが、翌日から腰痛に悩まされた。火を消す度にかがんだのが原因のようである。

御神輿は、琴平町を流れる金倉川に架かる鞘橋（さやばし）を渡る。銅ぶき、両妻唐破風（りょうづまからはふう）の屋根付橋である。御神輿の渡御など神事のときにのみ用いられ、通常は渡ることができない。

御神輿が鞘橋を渡るのは、「おくだり」のときだけである。「おのぼり」では通らない。御神輿が鞘橋を渡るときが圧巻であるが、写真係の家内は鞘橋のことを知らなかった。残念。

御神輿が麓の神事場(じんじば)に到着したのは、深夜の 11 時になっていた、ここで着御祭（ちゃくごさい）が営まれ、「おさがり」が無事終わった。馬場家に帰り着くと、0 時を回っていた。

翌日の 11 日は、神事場から出発する。神事場

には、御神幸に参加するたくさんの人々が集まって、記念写真を撮ったりして最後の夜を楽しんでいた。

今夜も私の役は火消筒持であった。齊藤氏の知人が、松明係の責任者であったことから、御神輿のすぐ前を歩けるようにしていただいた。松明持と火消筒持に取って、最高のポジションである。

御神輿の渡御（とぎよ）の歴史は古く、江戸時代以前から今に続いているといわれている。以前は、深夜にもかかわらず数万人の参拝者・見物客が沿道を埋め尽くしていたようであるが、最近では少なくなっている。特に、二日目の「おのぼり」は少ない。

時間帯が遅いのも人出が少ない大きな原因のように感じた。さりとて昼間にすれば、御神幸に参加する人を集めるのが難しくなる。誰もが昼間の仕事を持っているためである。

表参道の階段の登り口まで来ると、松明は回収された。後は、石段を 477 段上って社務所まで行き、そこで火消竹筒と着ている衣装を脱いで返却すれば私たちの役目は全て終了である。

私は、何事にも当事者意識を持つことをモットーとしている。傍観者では味わうことができない満足感が得られた。改善すべきと思われる御神幸の課題もたくさん見えた。何よりも大きな成果は、「こんぴらさん」がとても身近に感じられるようになったことである。

【2013 年 4 月 25 日記】